

読みを深める力を付ける国語の学習のあり方

～ 物語教材文の「山場」に焦点付けた読み取り ～
第4学年国語「走れ！」の実践を通して

加茂市立須田小学校
教諭 廣嶋 和人

1 はじめに

当校では、「主体的に学習に取り組み、意見を交流して学びを深める子」を校内研究主題に設定し、国語学習に焦点付け、日々授業改善を図っている。

これは、教材文で学んだこと（身に付けた力）を、別教材（並行読書）の読み取りに生かす場を設定し、子供の読みを深める力の育成を目指している。

学習指導要領（国語編）では、中学年での構成読み（状況設定－発端－事件展開－山場－結末）の大切さを挙げている。これは、説明文教材の「序論－本論－結論」の段落構成に当たる。叙述に即して文章を論理的に読み取る上で重要な力である。

物語全体の構成を意識しながら、登場人物の相互関係や中心人物の心情等が大きく変化する「山場」を読み取る力を付けることで、子供の読書活動の深みを増すと考える。

2 気持ちの変化を読み取る指導のポイント

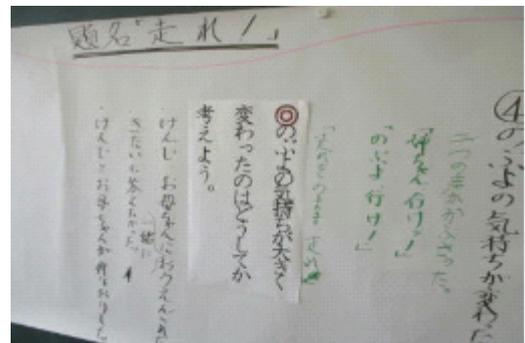
（1）多様な考えを生み出す学習課題

子供たちから多様な考えを引き出すことが、一人一人の読み取りをさらに深める。そのため、学習課題（◎）に、子供の考えにずれを生む要素を含ませる。ここで「ずれ」とは、個々の子供の生活体験や学習スキル等から生まれる「読み取りの深さの違い」である。具体的には、子供の関連する生活点付けて設定する。このことで、物語教材を読む際の視点を意識付けることになる。

体験を基に、①教材文の構成②人物の心情等の変化を表す記述から、「中心人物の変容」に焦点付けて設定する。このことで、物語教材を読む際の視点を意識付けることになる。

（2）構成読みを意識した板書の視覚化

叙述に即した読み取りの浅い子供の特徴として、教示文の1ヶ所をそのまま取り上げている場合が多い。これを、人物の気持ちの変化に着目した読みに高める必要がある。そこで、授業では、子供たちの発言を、人物の気持ちの変化を捉える要素（①気持ちが、②どの場面で、③どのように変わったのか）で見極め、物語の構成を意識しながら整理する。このことで、構成読みを視覚的に具体的に共有することに繋がる。



（3）子供との対話を大事にした対応

読み取ったことを、そのまま的確に表現できる子供だけではない。学級には、自分の考えをうまく表現できない子供もいる。常に、子供の発言の真意を確かめるための問い返しが大切である。その際、「前ははどうだったの?」「そう思うのはどうして?」等、対話しながら整理する姿勢を大切にしたい。

3 授業の実践 ～4学年「走れ！」（7月実践）

本教材の場面選定が運動会で、子供の生活体験に根ざした読み取りが期待できる。ただ、中心人物の心情の変容には、「走ること」と「家族」に対する2つの要素が絡み合っている点に特徴がある。

（1）単元の指導計画（9時間）

1次（1時間） 学習の見直しをもつ

○登場人物の気持ちが大きく変化する物語を5年生に紹介する。

2次（6時間） 教材文の読み取る

- 状況設定（家庭の様子等）の読み取る
- 発端（弟の心情等）の読み取る
- 事件展開（母の特製弁当の思い）の読み取る
- 山場（中心人物の心情変化の理由）の読み取る
- 結末（家族の関係等の変化）の読み取る

3次（2時間） 紹介文を書く

- 中心人物の心情の変化を中心にした物語の紹介文を作成する

(2) 本時の指導（7／9時間）



◎ 中心人物（のぶよ）の気持ちが大きく変わったのはどこでしょうか。

C 1 「走れ そのまま走れ」のところ。

C 2 「ねえちゃん、行け」「のぶよ 行け」のところ。

C 3 はじめは弟で、後は母親。

C 4 （母親の特製弁当の）わりばしに書かれていた応援メッセージで、弟がうれしくなつた

その弟の応援で、のぶよの気持ちもほどけていったと思います。

C 5 弟は「ぼうしをぐっとかぶってかけていった」とあるので、(すぐには) うれしいのではないと思います。

C 6 弟と母親の応援で、期待に応じて一生懸命走ったと思います。

C 7 いっしょに応援したので、(二人が) 仲直りしたんだと思った。

子供の発言にあるように、中心人物（のぶよ）の家族への心情（寂しさ→一緒にの嬉しさ）に、子供たちの意識が安定してきた。波下線部分の発言を取り上げ、中心人物（のぶよ）が「走ること」に対して思っていた気持ち（苦手意識）を問い返すべきだった。しかし、授業の残り時間を考え、本時の学習をまとめとし次時の学習に回した。

4 おわりに

今回学習した教材文は、前述したように、中心人物の心情に2つの要素が含まれていた。子供は、「走ること」や「家族」のどちらを意識して発言しているか「曖昧」である。これを「問い返す」ことで、自分や友達の考えを、「違い」ではなく、「ずれ」として「関連付け」、より深い読み取りに繋げることができる。2つの要素をうまく板書することが出来なかったことが反省された。今後も、視覚的な板書のあり方を工夫していきたい。

単元の終末で、各自が選んだ本についての紹介文をまとめる言語活動を設定した。物語の構成やテーマ等から作品を選んだ。

「夕日の中のライオン」（工藤 直子 作）

「5月のはじめ、日曜日の朝」（石井 睦美 作）

「あんず林のどろぼう」（立原 えりか 作）

「ふき子の父」（砂田 弘 作）

読書の紹介文と言うと、主人公の行動の面白さや意外性の記述で終わりがちであった。しかし、子供の紹介文を見ると、物語の山場に当たる場面での中心人物の心情の変容に着目したものが多く見られた。今後とも、実践を積み重ねていきたい。

